

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目 日本古典文学における怨霊の生成過程と鎮魂に関する研究

申請者氏名 程 青

本研究は日本文学に構造化されている御霊信仰に関して考察したものである。御霊信仰に関する従来の研究は、政治史・宗教史・思想史などの歴史的な観点からアプローチする傾向にあり、文学的なアプローチに関しては、「記紀神話」を対象とする発生論に比重が置かれていたと言える。それに対して本研究では、御霊信仰というものが、文学作品という媒体によって時代を越えて継承されてゆくという予測のもとに、『源氏物語』（平安時代）、謡曲『葵上』（中世）、御伽草子『六条葵上物語』（近世前期）、読本『雨月物語』（近世中期）、実録小説『四谷雑談』（近世後期）、歌舞伎怪談狂言『東海道四谷怪談』（近世後期）といった作品を対象として考察を展開した。そして、各作品の中に御霊信仰がどのようなかたちで組み込まれているかを分析し、その構造と展開の様相を具体化することに努めた。

第一章は、『源氏物語』の登場人物の一人である六条御息所をめぐる御霊信仰の構造を考察したものである。考察の手がかりとして、六条御息所に関わって用いられる「恥」という表現に注目した。具体的には、六条御息所の怨霊化の契機を「車争い」によって引き起こされた「恥」にあったと解し、そのように「恥」を契機とする怨霊化の在り方を、記紀神話に登場してくる崇り神の系譜に連なるものとして捉えた。そして、このような崇り神の系譜に連なる六条御息所が、娘の斎宮に同伴して伊勢へと下向することの象徴的な意味を、崇り神に対する封印として解した。

第二章は、『源氏物語』の翻案である『六条葵上物語』を対象として、そこに見られる御霊信仰の構造を論じたものである。考察の手がかりとして、「後妻打ち」というモチーフに注目した。先妻が後妻に暴力をふるう「後妻打ち」という習俗は、六条御息所物語のモチーフとして構造化されて以降、中世の謡曲『葵上』を經由して、近世の御伽草子『六条葵上物語』へと展開している。本稿では、この「後妻打ち」のモチーフに政治性や社会性が関与してくる点に着目し、そこに御霊信仰と共通する構造を見出した。そして、その構造の帰着点となるプロットとして鎮魂が用意されていることを指摘した。

第三章は、『雨月物語』の「白峯」と「青頭巾」に見られる鎮魂の構造について論じたものである。まず、『雨月物語』の第一篇目に置かれている「白峯」について、冒頭文に見える「坂」という語を手がかりとしつつ、そこに崇徳院をめぐる御霊信仰の構造が窺えることを示した。そして、その構造の帰着点となるはずの鎮魂というプロットが未遂に終わっていることに注目した。次に、第八篇目の「青頭巾」に窺える御霊信仰の構造について分析し、「白峯」では未完の状態にあった鎮魂というプロットが、この「青頭巾」において遂行されていることを指摘し、「白峯」と「青頭巾」とが補完的な関係にあることを明らかにした。

第四章は、歌舞伎怪談狂言『東海道四谷怪談』の主人公お岩をめぐる、そこに見られる御霊信仰の構造を考察したものである。なお、考察を展開するにあたっては、『四谷怪談』の成立に先行する実録小説『四谷雑談』を比較対象として取り上げた。この両作品を対比的に分析した結果、お岩の怨霊化の契機として政治的な要因が浮上してくることを指摘し、そこに御霊信仰の構造との一致が見出されると指摘した。そして、御霊信仰の構造のもとにお岩の怨霊像を捉え直した場合、怨霊のお岩が民間では福をもたらす神として奉斎されている現象について、合理的に解釈することが可能になると論じた。

第五章は、『東海道四谷怪談』の主人公お岩の怨霊像について、「産女」という観点から考察したものである。「産女」とは、死んだ妊婦の妖怪を指す語であるが、その定義に照らしてみた場合、お岩は厳密には「産女」とはならない。しかし、『四谷怪談』の描くお岩の怨霊像は、「産女」に重なるものとしてある。本稿では、その「産女」としてのお岩の怨霊像を、「流れ灌頂」、「血」、「川」などの表現を手がかりとしつつ分析し、お岩が「産女」として造形されている可能性について論じた。更にまた、「施餓鬼回向」という鎮魂儀礼にも注目し、『四谷怪談』が盂蘭盆会の時期に上演されたことの意味を、お岩の怨霊を鎮魂する目的にあったと推定した。

結論では、各章で取り上げた文学作品の文脈に組み込まれている御霊信仰の構造について総括し、その継承と展開の様相を具体化するうえで文学研究によるアプローチこそが有効であることを論じた。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 97 号	氏 名	程 青
論文題目	日本古典文学における怨霊の生成過程と鎮魂に関する研究		

(論文審査概要)

本論文は、古代平安期から近世江戸期にかけて成立した諸文学作品の中にかがえる御霊信仰の構造と、そして、その展開の様相を明らかにしたものである。御霊信仰とは、廃太子事件などの政争に巻き込まれて不遇の死を遂げた人の怨念が、悪霊となって社会に災難をもたらしているのではないかという見立てのもと、その祟りを為す怨霊の荒ぶる魂を鎮め、即ち鎮魂という行為によって怨霊を人格化し、御霊として祀っていく一連の共同体的発想を指す。本論文では、この怨霊の生成過程から鎮魂へと至る一連のプロセスを御霊信仰の構造として措定し、その構造が文学作品を媒体として超時代的に継承されてゆく様相を、『源氏物語』（平安時代）、謡曲『葵上』（中世）、御伽草子『六条葵上物語』（近世前期）、読本『雨月物語』（近世中期）、実録小説『四谷雑談』（近世後期）、歌舞伎怪談狂言『東海道四谷怪談』（近世後期）といった作品の分析を通して具体化している。

本論文の構成は、序章、及び五つの章にわたって展開される本論部分、そしてそれらを総括する終章から成る。また、巻末には、各章毎の参考文献目録を収める。各章のタイトルは以下の通りである。

序 章：日本古典文学に見られる御霊信仰の構造に関する研究の可能性

第一章：恥をかいた神としての六条御息所

— 『源氏物語』の御霊信仰に関する一考察—

第二章：『六条葵上物語』における御霊信仰

— 「後妻打ち」の展開をめぐって—

第三章：『雨月物語』における鎮魂の補完的構造

— 「白峯」と「青頭巾」に見られる御霊信仰の構造をめぐって—

第四章：お岩の怨霊化と御霊信仰

— 『四谷雑談』から『四谷怪談』への展開—

第五章：『東海道四谷怪談』における鎮魂儀礼

— お岩の産女怨霊像をめぐって—

終 章

参考文献一覧

1. 創造性

思想史や宗教史の観点によれば、平安期の御霊会に端を発する御霊信仰は、当該期に隆盛を迎え、中世以降、現世利益を求め人々の心とともに祭礼化され、衰退していくと把握されてきた。本研究はそういった史的展開を見据えつつも、怨霊の生成から鎮魂へと至る継起的展開を構造として抽出し、その構造を、特定の時代の文学作品だけではなく、広く文学史上の諸作品の中に見出そうとするものであり、そこに新規性を窺うことができる。特に、近世期の諸作品に散見する怪異を、御霊信仰の構造という観点から捉え直していこうとする論考（第三・四・五章）については、近世怪談文学研究に新たな論点を提供するものであると言える。

例えば第三章は、『雨月物語』の中に収められた二つの短編（「白峯」と「青頭巾」）の関係を、怨霊の生成（「白峯」）と鎮魂（「青頭巾」）という、御霊信仰の構造の構成要素として把握する試みであり、『雨月物語』という短編集を総体として捉える視点を提供するものとなっている。

第四章は、『東海道四谷怪談』に描かれるお岩の怨霊化の契機についての考察であるが、『四谷怪談』の典拠となった『四谷雑談』をも視野に収めることで、物語の背景にあった政治的構図の前景化を果たし得ており、怨霊化の契機として政治的失脚という、いわば個の関係を越えた力学が働いている可

能性について提起するものとなっている。

第五章は、『東海道四谷怪談』に描かれるお岩の怨霊の鎮魂について考察したものである。本章では、『四谷怪談』の大詰となる「蛇山庵室の場」の本文に、お岩を「産女」と表現する条がある点に着目し、その「産女」としてのお岩をめぐる「流れ灌頂」や「施餓鬼回向」といった供養が行われていく様相を分析。それらの供養を鎮魂儀礼と見なすことで、御霊信仰の構造のもとにその供養の位置づけや機能を捉え直している。なお、この「流れ灌頂」や「施餓鬼回向」といった鎮魂儀礼は盂蘭盆会に統合される祭祀とされており、そうであるならば、本章の考察は、『四谷怪談』が当初、盂蘭盆会に上演された亡霊送りのための夏芝居としてあったという外的な成立事情を、作品内部の表現構造からも徴し得る可能性について示したことになる。『四谷怪談』の主題とは何かという本質的問題とも絡み、従来の作品観に一石を投ずるものとなろう。

なお、第一章は、『源氏物語』に描かれる六条御息所の生霊化と、その後の展開としてある伊勢下向の二つの出来事を、御霊信仰の構造における「怨霊の生成過程」と「鎮魂」という各構成要素にそれぞれ対応するものとして把握する論であるが、こういった枠組みについては従来の『源氏物語』研究の諸成果に拠りつつも、そこに「恥」という語が契機として絡んでくる可能性について説くところは新たな視点を提供するものとなっており、注目に値する。

また、第二章は、近世の御伽草子『六条葵上物語』についての考察であり、本作品を中世の謡曲『葵上』と共に『源氏物語』をモチーフとした文芸的展開相の一つとして捉え、それらの展開において鎮魂に相当する部分がいかなる変化を見せているかについて論じたものとなる。従来、あまり顧みられることの無かったこの作品を、文芸的展開の系譜上に位置づけた点は価値が認められる。

このように本研究は、特に近世期の諸作品を御霊信仰の構造という観点から捉え直そうとする試みにおいて一定の成果を収めており、創造性において優れていると判断される。

2. 論理性

本研究の方法は、日本の民間信仰の一つである御霊信仰に着目し、その信仰の生成過程を複数の構成要素の因果的連なり（プロット）として抽出。抽出したプロットを「御霊信仰の構造」として措定し、文学作品の内部にその構造を読み取っていくというものである。具体的には、『日本三代実録』の貞観五年（863）五月二十日条に見える神泉苑での御霊会の記事を基に、その御霊会で祀られた六座の御霊のうちの早良親王の事跡を念頭に置くことで、怨霊の生成過程から鎮魂に至るプロットとして、「Ⅰ. 政治的失脚」「Ⅱ. 勝者と敗者が現れ、敗者は死に、あるいは排除される」「Ⅲ. 敗者は勝者に祟り、天変地異を起こす」「Ⅳ. 勝者は災異を畏怖し、敗者を鎮魂する」という四項目を抽出し、これを「御霊信仰の構造」の範型として措定する。そして、この措定した「御霊信仰の構造」が、どのようなかたちで文学作品の内部に組み込まれているのかを、御霊信仰が確立した平安期の文学、その展開相としてある中世の芸能、そして大衆化を見せる近世の文芸と、諸時代の代表的なジャンルの作品を組上に載せながら検証してゆくことになる。

前項でも触れたように、思想史や宗教史などの史的観点からは、御霊信仰の隆盛は平安期に求められ、以後、衰退していくという見立てとなるが、本研究では、信仰というものは文学作品を媒体としながら、時代を超えて継承されていくのではないかという仮説を立てることになる。そして、そういった仮説のもとに、平安から近世にかけての各時代に成立した諸文学作品を対象として、そこに「御霊信仰の構造」を見出してゆく。すなわち、第一章と第二章では、『源氏物語』『葵上』『六条葵上物語』といった文学作品を通じて「六条御息所の怨霊の生成過程と鎮魂」が、第三章では、『雨月物語』の「白峯」や史実を踏まえつつ、「崇徳院の怨霊の生成過程と鎮魂」が、第四章と第五章では、『四谷雑談』や『東海道四谷怪談』を通じて「お岩の怨霊の生成過程と鎮魂」が、それぞれ、上記した早良親王の怨霊の生成過程から鎮魂に至る四項目のプロットに準拠するかたちで見出されることになるのである。そして、その検証結果に基づいて、荒ぶる怨霊を神格化することで鎮魂してゆくという社会共同体の在りようが、時代を超えて営々と引き継がれているということが結論として導き出されるに至る。

このように本研究の基本的な姿勢は、いわば通時的な観点からは窺えない部分を、文学作品の構造分析という共時的な方法と視点を導入することで視野に収めようとするものであり、その論証の手続きには一貫性が認められる。よって、本研究の論理性は優れていると判断した。

3. 厳格性

本研究では、論を展開する前提として、序章において先行研究の状況が概観されている。本研究の問題意識の根幹部分を成す御霊信仰に関する研究については、民俗学的視点による研究、文学的視点

による研究があるとし、柴田實編『民衆宗教史叢書 5・御霊信仰』（雄山閣、1983年）に収められている諸論（柴田實「御霊信仰研究の成果と課題」、井上満郎「御霊信仰の成立と展開—平安京都市神への視覚—」、菊池京子「御霊信仰の成立と展開—信仰の支持階層を中心として—」、桜井徳太郎「怨霊から御霊へ—中世的死霊観の展開—」）や、『国文学解釈と鑑賞・特集—古代に見る御霊と神仏習合』（至文堂、1998年3月）に収載の諸論（飯泉健司「御霊信仰の研究史」、居駒永幸「『風土記』に見る祟り神信仰」、村山修一「御霊信仰とは」、鎌田東二「記紀神話に見る御霊信仰」、近藤信義「『万葉集』と御霊」、前田雅之「『今昔物語集』に見る御霊信仰と神仏習合—存在しないはずの御霊の存在をめぐって—」）を通じて研究の動向が押さえられている。

また、各章の冒頭では「問題提起」の節を設け、研究対象とした『源氏物語』（第一章）、『六条葵上物語』（第二章）、『雨月物語』（第三章）、『四谷雑談』（第四章）、『東海道四谷怪談』（第四章・第五章）などの文学作品に関連する先行研究の渉猟と整理に努めており、そういった手続きのもとに本研究の立場やプライオリティーを画定し、論を展開していくという姿勢は本研究を通して一貫している。こういった点をもって、本研究の厳格性を優れていると判断した。

以上、審査委員3名の合議により、全体として「優れている」と判断し、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果

合・否

審査委員 主査 (氏名) 森野正弘

(氏名) 坪郷 莫彦

(氏名) 富平 美波

(氏名) _____ (印)

(氏名) _____ (印)